佳作

ジィジへ絵本の読み聞かせ

小山　節子

柳田先生　二年振りにお便りを書かせていただいております。

本年四月六日（月）、夫は大学病院に緊急入院いたしました。動脈硬化による脳梗塞でした。主治医による見立てでは、“認知機能の回復は厳しいかもしれません”との事でした。

無念だろうな。

若い時から、誰よりも熱心に働いた人でした。自分の工場を持ってからは、納期に追われ、徹夜は当たり前、資金繰りに頭を悩ませ、それでも、“日本経済を低辺で支えているのだ”と、いつも明るく、耐えぬいてきました。

そして　今、

「ここは　どこ」

「私はナゼ　ここに居るの」

と、何度も何度も私に聞きます。自分の意志とは、全く無関係に、それも突然に、右視野と記憶能力を奮われたのです。

何と理不尽な。

主治医からの入院診療計画書を、読んでいる時、“意欲低下の可能性・・なし”の記載を見つけました。“意欲”、夫の一番良いところは残されたのです。

そこで、私は何とか夫の失いつつある記憶を、つなぎとめたいと思いました。それに　これから新しい記憶を再生したいと考えました。「それは無

理だよ。お父さんにとっても　ツライことだよ」
と、息子は言いました。
　二週間後、夫は家に退院してきました。
「ユーちゃんに、絵本の読み聞かせをしてもらいたいんだけど」
と、春ママにメールをしました。
「いいよ」と、ユーちゃんは言って、土曜日に妹のハーちゃんと、まるで台風のように、ドタバタとやって来ました。
「ジィジが主人公の本があったから、これがいいと思って持ってきたよ。」と、長谷川義史・・作の『いいから　いいから』を、ジィジのベッドにドシンと坐って読み始めました。
　あるひの　ゆうがた。
　かみなりが　ゴロゴロ　なった。
　ぴかっと　ひかって、
　ドーンと　いった。
ジィジは「フン　フン」と言いながら隣で　ユーちゃんと絵本を見ていました。
　妹のハーちゃんは、カラフルなジィジへの手紙を持ってきました。
　じいじ　あわてちゃだめだよ‼
　またあたまぶつけちゃうからね。
　なおったらいっぱいあそぼうね‼　はるかジィジは、うれしそうに「ウン　ウン」と返事をしました。
　朝、ご飯が終わると、テーブルの上を片付けて、ジィジは薬を飲んで日記を書きます。一行書いては「頭がしめつけられるように痛い。」と横になり、又起きては二行目を書きます。（今では、ひとつき

にノート一冊書けるようになりました。）

そして、私は日記に加えて、『いいから　いいから』の読み聞かせをすることにしました。

4／27（月）ジィジは　「フン　フン」と、私の読み聞かせを聞いているようです。お話が終わると「おもしろい話だね」と言いました。

4／28（火）きのうより、話の内容が分かったようで“おじいさんは　パンツをぬぎました”のところで、声をあげて「ワハハ」と笑いました。途中、自分で「いいから　いいから」と復誦していました。

5／15（金）　福祉センターでの茶道教室の帰り道、歩きながら、ジィジはウッフと笑いました。二人で「いいから　いいから」をお互の合言葉にして歩き続けました。「ゆっくり　ゆっくり歩くんだよ。これからも　ずっと二人でね」と、ジィジは言いました。

そして　ある日のことです。夫は

「あの『いいから　いいから』の絵本は、とても良い絵本だね。ユーちゃんの本だから　私がもらう訳にはいかないよ。私に一冊買ってね。」と言いました。新しい記憶が再生された一瞬だと、私は思いました。

終わり